

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370096

研究課題名(和文)日本におけるコミュニティ音楽療法実践の民族誌的研究

研究課題名(英文)An ethnographic related research on community music therapy practice in Japan

研究代表者

三宅 博子(MIYAKE, Hiroko)

明治学院大学・文学部・研究員

研究者番号：40599437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：コミュニティ音楽療法は、対象者を取り巻く家族や仲間、地域との関わりのなかで音楽活動を行い、コミュニティ全体に変化をもたらすことを目的とする音楽療法の実践と考え方である。日本のコミュニティ音楽療法は、社会政策的な背景や目的、コミュニティにおける個と集団の関係などが欧米とは異なる。社会的排除に直面する当事者の社会参加や権利擁護に必ずしも直結していない分、音楽活動を介した参加者の対話と関係変容のプロセスには、多様な人々が協働する新たな文化や社会的価値観の創造に資する潜在的可能性が内包されている。

研究成果の概要(英文)：Community music therapy is a practice and idea of music therapy aimed at bringing the change in the community as a whole through facilitating music activities in the relationships with the family, friends and communities where the clients involved in. Community music therapy in Japan and those in Western societies seem to be differ in terms of social-cultural policy background and purpose, relations between individuals and groups in the community, and so on. While community music therapy in Japan is not necessarily directly linked to rights advocacy of the people facing social exclusion, the process of dialogue and transformation of diverse participants through music activities involve a potential to contribute to the creation of new cultures and social values.

研究分野：音楽療法

キーワード：音楽療法 コミュニティ音楽療法 社会包摂 文化創造

## 1. 研究開始当初の背景

コミュニティ音楽療法は、個人の病理に焦点を当てる従来の治療を超えて、対象者を取り巻く家族や仲間、地域との関わりのなかで音楽活動を行い、コミュニティ全体に変化をもたらすことを目的とする音楽療法の実践と考え方である。今世紀に入り、音楽療法の重要な潮流の一つとして世界各地で実践や研究が進んでいる。日本では、高齢者や障害者などを対象とするコミュニティ音楽療法の実践や研究が行われている。しかし、活動相互の連携が弱く、個々の事例研究が中心で、その実態は明らかではない。

報告者はこれまで、音楽療法士として障害者、神経難病者、高齢者、地域コミュニティの人々などを対象とする音楽活動に携わりながら、コミュニティ音楽療法の知見を参照し、病者・障害者の生のあり方と音楽活動の関わりについて実践と理論の両面から考察することを課題としてきた。そのなかで、日本と欧米との音楽療法の成り立ちの違いに目を向ける必要性を感じるようになった。欧米では、個人の治療や自己実現を重視する。近代音楽療法は個人に対する治療形式として確立したし、コミュニティ音楽療法も「対象者の社会参加の権利」、すなわち社会における個人の権利を目指している。一方、日本では、個人よりも集団性を重視する。日本の音楽療法は、高齢者の集団歌唱療法をはじめ、多くが集団活動の形態で行われてきた。そこでは、集団における個人の治療や自己実現よりも、周囲との調和や集団全体の和が重視される傾向がある。したがって、日本におけるコミュニティ音楽療法の理解において、対象者個人と社会との関係の変容という図式は当てはまらない。むしろ集団における個人どうしの関係性に注目し、関係の相互変容と場全体の成り立ちを明らかにする必要がある。

報告者はこれまでの研究で、欧米の理念を背景としたコミュニティ音楽療法における社会参加アプローチには、現状の社会や音楽文化の側に対象者を「組み込む」形になってしまう可能性がはらまれていることを指摘してきた。一方、立場や背景の異なる参加者の関係の相互変容の過程に着目することで、社会的に不利な立場に置かれた人と社会との関係を変容させるための、従来とは異なる視座や方法論を提案できる可能性がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本で行われているコミュニティ音楽療法実践の参与観察にもとづいて、日本の文化社会状況に即したコミュニティ音楽療法の理念と方法論を明らかにすることである。本研究では、「社会で相対的に不利な立場に置かれた対象者が、音楽活動を通じて社会や音楽文化に参加する」という

従来のコミュニティ音楽療法の参加型アプローチ(表1-A)に対し、立場や背景の異なる参加者どうしの関係の相互変容と場全体の成り立ちに着目し、多様な人々の共在を可能にする音楽的・社会的環境構築の過程を探求する(表1-B)。

(表1)コミュニティ音楽療法の関係論的概念の違い

	分類	アプローチ	変容するのは「何か」「誰か」
A	従来	参加型アプローチ	社会、音楽文化への参加 対象者の変容
B	報告者	相互変容型アプローチ	差異に基づく関係の変容 実践に関わる全員の変容、環境の構築

## 3. 研究の方法

上述の目的を達成するため、下記の方法で研究を進める。

### (1)文献調査による視点の整理

世界および日本におけるコミュニティ音楽療法の文献調査により、背景や理念、実践の様相などの諸特徴を整理する。

### (2)訪問調査

日本において、コミュニティ音楽療法の考えを参照して実践を行っている音楽活動を訪問し、参与観察および聞きとり調査を行う。

### (3)実践調査

様々な人々が利用する地域のコミュニティ拠点において、コミュニティ音楽療法の考えに基づいた音楽活動を立ち上げ、活動の参与観察を行う。実践から得られた知見をもとに、多様な人々の協働や共在の様相と音楽活動との関係について考察する。

### (4)研究交流と対話

国内外の学会や研究会に参加し、音楽療法研究者・実践者と広く交流して意見交換を行う。

以上から、日本におけるコミュニティ音楽療法の理念や方法論についてまとめ、その意義を考察する。

## 4. 研究成果

### (1)視点の整理

コミュニティ音楽療法は、対象者個人の病理や問題に焦点を当てて変容させる従来の音楽療法の治療的モデルを再考し、その枠にとどまらない幅広い実践を育む概念として語られてきた。なかでも特徴的なのは、音楽療法が目指す「健康」を、個人をとりまくコミュニティとの関係から考える点である。コ

コミュニティ音楽療法では、病気や障害ゆえに社会の一員としての参加や資源へのアクセスが困難な状況に対し、音楽活動を通じてコミュニティとのつながりを作り、個人とコミュニティの両方を変容させ、社会の一員として包摂することを促進する。このような視点が発展してきた背景には、コミュニティ音楽療法の基礎となる実践が行われてきたヨーロッパの社会状況や文化政策が大きく関わっていると思われる。グローバリゼーション、文化多様性、経済危機などの状況のなか、全ての人の地域社会への参加と再編成、健康福祉システムの見直しが進んでいる。これらは多かれ少なかれ今日の世界的な傾向になっており、コミュニティ音楽療法は、利用者が選択や要望の主体となる新たな健康サービス制度に応じて、音楽療法の役割や方法が変化していく道筋を示すものと理解されるようになってきている。

翻って日本の状況を見ると、その意図や可能性について広く議論するには到っていない。2015年に音楽療法学会誌で「コミュニティ音楽療法を考える」特集が生まれ、理論的概要と日本での実践例が報告された。これは、2003年にコミュニティ音楽療法の提唱者の一人であるスティーグが日本で招聘講演を行って以来、はじめてのことである。

コミュニティ音楽療法の理解には相当の幅があり、いくつかの方向性が見出される。

地域で行うレクリエーション的な集団音楽活動

一般的にはこのように曖昧に認識されることも多く、「地域の“中で”はなく、地域と“共に”活動する」(変化の対象の重点は地域)というコミュニティ音楽療法の意図が浸透しているとは言い難い。

日本音楽療法学会「地域プラン」

日本音楽療法学会が2012年より行う「音楽療法地域プラン」では、「コミュニティ音楽療法」の用語を参照し、地域の高齢者を対象に介護予防的な音楽療法を展開している。しかし、音楽療法の専門資格化のために、介護予防事業への参入の方略として行われる側面が強く、コミュニティ音楽療法の考えがどう取り入れられているかは定かではない。

実践上の必要性に根差した、独自のコミュニティ音楽療法実践

対象者を取り巻く状況のなかに個人とコミュニティをめぐる社会文化的な問題を見出し、コミュニティ音楽療法の考え方を参照した独自の実践へと展開していった事例が、少数ではあるが見受けられる。

本研究では、 の実践に着目し、見学調査を行う。(なお、「コミュニティ音楽療法」という言葉を用いていないが、同様の問題意識に基づく実践例も相当数あると思われる。)

## (2) 訪問調査

以下の三つの音楽団体を訪問し、活動の参与観察および聞きとり調査を行った。

NPO 法人三重音楽療法地域推進協会(MT ちいき)

2009年頃より障害児・者を主な対象に、三重県にある地域の楽器店に蓄積された資源(空間・道具・システム・人材・ネットワークなど)を活用し、地域音楽文化の拠点としての活動を展開している。活動は、障害児・者対象の音楽療法コース、音楽教室講師によるレッスン、小集団のバンド、地域の音楽愛好家・障害者・高齢者・社会生活に困難を抱える人等が参加する月例コンサートが、有機的に組み合わせられている。活動を通じて、楽器店という場で育まれる地域音楽文化に障害児・者が参加し、それまで障害者との関わりがなかった音楽講師に意識変化が見られ、多様な人々が関わる音楽活動の場が形成されている。課題として、主宰の吉田豊氏は、異なる立場や背景を持つ参加者に「その時その場でどのように働きかけ、どうやって共感的な場を作っていけばよいか」(吉田2015)という実践面のアプローチを挙げている。

子飼コミュニティ音楽療法プロジェクト  
熊本県子飼地域における熊本大学の地域研究プロジェクトの一環として、2006年より在宅高齢者を対象に活動している。地域の商店街での活動を続けていたが、現在はコミュニティセンターに場所を移している。対象者とコミュニティを結び、発信する役割としてコンサートの実施を重視しており、高齢者の創造性の発揮や社会参画への意欲の高まり、学生スタッフと高齢者の世代間交流などの機会となっている。活動から得られた知見として、主宰者の木村博子氏は、個と集団の関係にかんする欧米と日本の文化差を挙げる。日本のような集団主義的傾向が強い社会で、集団内に生じる内部集団どうしの動きを見極めながら、いかにそれを解きほぐし、「よりストレスの少ない、個人の可能性が開かれやすい環境を創り出す」(木村2015)ことができるかが課題だとしている。

## 音遊びの会

知的障害児者・即興音楽家・音楽療法家が集まり、「即興演奏による新しい表現の開拓」(沼田2013)を目的に、2005年より兵庫県神戸市を中心に活動する。主宰者の沼田里衣氏は、これまでの音楽療法が障害者の表現をもっぱら治療的観点から捉えてきたことに疑問を持ち、その即興性や創造性に焦点を当てた領域横断的な視座からワークショップと舞台公演を行ってきた。活動の特徴は、背景や能力の異なる参加者の相互関係から生まれる独自の表現様態の探求にある。活動当初の課題であった“障害者”と“音楽家”の共

演関係の成立に向けた模索を通じて、参加者が幅広い音楽表現スタイルを受け入れ、価値観の異なる人どうしの関わりを求めようになった。さらに、舞台公演を通じて「音楽とは何か」「障害とは何か」など社会の共通認識を問い直す視点を発信している。

これらの活動は、それぞれ目的も形態も様々だが、それぞれの現場に根差した状況や資源、課題を活かして文化創造的な活動を展開していることが確認できた。共通の課題として「立場や背景の異なる参加者がどのようにして共同的な場や関係を育むことができるか」が挙げられた。これに対し、実践の場で生じる具体的な問題に即して創意工夫することにより、結果的に文化創造的な活動が育まれるのではないかと推察された。その際の着眼点として「参加者の内部集団どうしの関係性の流動化」「価値観の異なる人の関わり方の促進」などが挙げられる。これらをより詳細に明らかにするため、実践活動を通じた調査とその分析に重点を置くことにした。

### (3)実践調査

#### 芝の家・音あそび実験室

2015年より、東京都港区にある地域コミュニティの拠点「芝の家」で、地域の人々のつながり作りに音楽活動が寄与できる方法の探求を目的に、即興演奏・歌作り・楽器創作などの音楽ワークショップ「音あそび実験室」を企画・実施した。24回のワークショップを行い、乳幼児から高齢者まで幅広い年齢や国籍、興味関心の人々が参加した。「音あそび実験室」の特徴は、参加の様態があらかじめ明確に決められていないことにある。「誰でも参加可能・出入り自由」という活動の枠組みと、芝の家という場の特性から、音楽活動に来た人・芝の家に来た人・たまたま通りかかった人などが混在し、音楽活動とそれ以外の活動が不断に混じり合っている。通常の音楽セッションや音楽ワークショップでは参加者が固定していることも多いが、ここでは訪問調査から得られた知見を踏まえ、多様な参加の仕方を含みこむような場を現出させることを課題とし、参加者の多様性を生かす音楽活動のプログラムや活動の進め方について検討した。結果、参加者を包摂する枠組みをあらかじめ定めるよりも、参加者や状況に応じて枠組みを柔軟に変化させることが創造的な活動につながるということがわかってきた。そのような枠組みの変化が参加者どうしの関係を流動化し、ある参加者の存在や記憶が浮かび上がったり、既存の関係とは異なる関係性が生じたりするのではないかと考えられる。また、音楽活動を媒介として参加者の要望や芝の家の資源(物的・人的・ネットワーク的)を結びつけていくことによって、既存の資本主義的経済活動とは異なる、知識や技術・人的資源などの「流通」が起こっていることが推察された。今後、これらがどの

ようにして起こるのかを詳細に明らかにするために、生態学的な視座からの研究手法の精練が課題である。

重度重複障害のある青年の個人音楽療法  
ここでは、音楽療法における参加の概念を、活動への参加を通じて一体感や共感を得る「参加による共同性の確認」ではなく、活動を媒介として互いに異なる経験世界を感じ、新たな共同性の基盤を築く「参加による差異の感知と新たな共同性の(再)創造」と捉えた。

実践調査からは、従来型のコミュニティ音楽療法とは異なる社会参加のありかたが見えてきた。それは、「社会で不利な立場に置かれた人が音楽活動への参加によって当該社会へ包摂される」社会適応的ありかたではなく、「多様な背景を持つ人々が互いの差異を持ち寄り、音楽活動を通して新たな共同性の基盤を築く」文化創造的なありかたである。

### (4)研究交流と対話

研究成果を踏まえ、第15回世界音楽療法大会において、国内外の音楽療法研究者・実践者と共同で、二つのラウンドテーブルを企画・実施した。一つは、「コミュニティ音楽療法における社会包摂と排除」をテーマとし、従来のコミュニティ音楽療法が重視してきた「音楽活動への参加=社会参加」という見方を批判的に問い直し、立場や背景の異なる参加者間が相互に関係を変容するプロセスに目を向ける必要性を提起した。また、コミュニティ音楽療法や社会包摂の概念になじみが薄い日本の研究者・実践者がこれらの議論に触れる機会になったと思われる。もう一つは、「音楽療法の臨床プロセスを知り、伝える」をテーマに、活動場面で起こっている出来事の多様な質に光を当てる、最新の研究方法論の紹介と討議をした。ここでは、人と人、モノ、環境、異なる時空間などをつなぐ様々な関係性を、個人と個人の関係に還元できない「わけられない関係の様相」としてどのように把握することがきるのが課題として浮かび上がった。

以上を通じて、日本におけるコミュニティ音楽療法とは何かを考える土壌作りの一歩を踏み出すことができたと考える。日本のコミュニティ音楽療法は、社会政策的な背景や目的、コミュニティにおける個と集団の関係などが欧米とは異なる。社会的排除に直面する当事者の社会参加や権利擁護に必ずしも直結していない分、音楽活動を介した参加者の対話と関係変容のプロセスには、多様な人々が協働する新たな文化や社会的価値観の創造に資する潜在的可能性が内包されている。今後の課題として、多様な人々が共に在りながら、協働して新たな社会文化環境を育むような共同性のあり方を、さらに詳しく

精査していく必要がある。そのための課題の一つに、音楽活動の場で起こっている現象を、関係論的・システム論的視座から多層的に把握する研究方法論の精練が挙げられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Kumi shimada, Hiroko Miyake, Rii Numata 2017, Social inclusion and exclusion through community music therapy in Japan, Music Therapy Today, 査読有, vol.13 (1), 505-506, 2017

三宅博子、長津結一郎、井尻貴子、アートとケアにおける研究とその視座 対話型実践研究を事例に、アートミーツケア学会オンラインジャーナル、第7号、査読有、37 - 50、2016

[http://artmeetscare.org/wp-content/uploads/2017/03/3\\_H\\_Miyake\\_37\\_50.pdf](http://artmeetscare.org/wp-content/uploads/2017/03/3_H_Miyake_37_50.pdf)

Hiroko Miyake, Bio-political perspectives on the expression of people with disabilities in music therapy: Case Examples, (「障害のある人の表現に関する生政治的視点: 音楽療法の事例から」), Voices: A World Forum for Music Therapy, 査読無(招待), vol.14(3), 2014

DOI: <http://dx.doi.org/10.15845/voices.v14i3.800>,

[学会発表](計 6 件)

Hiroko Miyake, Rika Ikuno-Yamamoto, Kakuko Matsumoto, Simon Gilbertson, Knowing/Communicating the Clinical Process of Music Therapy Practice: 2) Illustrative Approaches. The 15th World Congress of Music Therapy, 2017

Kumi shimada, Hiroko Miyake, Rii Numata, Rika-Ikuno Yamamoto, Yu Wakao, Gary Ansdell, Social inclusion and exclusion through community music therapy in Japan. The 15th World Congress of Music Therapy, 2017

沼田里衣、嶋田久美、三宅博子、アート・存在・仕事 社会包摂の議論を出発点として、アートミーツケア学会 2017 年度大会、2017

Hiroko Miyake, Building space for diversity: Creative music-making project in urban Japanese context. The 10th European Music Therapy Conference, 2016

三宅博子、ある重度重複障害児との個人音楽療法-互いの「異なり」を接点とした 対

話のプラットフォーム創成の営み、第16回日本音楽療法学会学術大会、2016

生野里花、松尾香織、松崎聡子、小柳玲子、三宅博子、近藤里美、支え合い、学び合う音楽療法士 「教わる知」から「ボトムアップの知」へ、第14回日本音楽療法学会学術大会、2014

[図書](計 2 件)

三宅博子、岩崎学術出版社、表現を支える環境をつくる: 副腎白質ジストロフィーを患う少年なおやの事例、ケースに学ぶ音楽療法、2017、172(担当分 35-54)

三宅博子、一心社(発行元: 大阪大学未来戦略機構)、A collaborative perspective for the music therapy profession and the Tojisha-Kenkyu movement in Japan, Ecologies of Care: Innovations through technologies, collectives and the senses, 2014, 322(担当分 77 - 85)

[その他]

ホームページ

芝の家・音あそび実験室

<http://otoasobilab.webcrow.jp/>

講演

三宅博子、コミュニティ音楽療法から見えてくる「音楽活動」のかたち、音楽療法ネットワーク三重講演会、三重県教育文化会館、2015

三宅博子、「芝の家・音あそび実験室」、ご近所イノベーション学校シンポジウム「ご近所イノベーションの時代」、慶應義塾大学東館6階 G-SEC LAB、2015

報告書

Hiroko Miyake, Conference report: The 10th European Music Therapy Conference 'A symphony of dialogues', Approaches: An Interdisciplinary Journal of Music Therapy, 査読有, 1-5, 2017

生野里花、三宅博子、ラウンドテーブル「臨床の知-音楽療法実践におけるプロセスの内容を知ることと伝えること: その1 プロセスを考えるとということ その2 具体的なアプローチ」、日本音楽療法学会誌、査読無、第17号2巻、2017

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅博子 (MIYAKE, Hiroko)

明治学院大学・文学部・研究員

研究者番号: 4 0 5 9 9 4 3 7